五行狂歌集

五行狂謌集

六樹園大人序
浅草菴大人跋

撰者 六帖園 桐雅雄
松櫻園 花千本

五行狂歌集

畫圖 岳亭
揮毫 北榮子

集者 楓樹園茂葉
六方園東雄
端午園千巻

彫刻 玉光舎

木火土金水の五行をもて五方にわかち
五色に配しまた支幹にたぐへら
おしなべてむすひの神のおきてなるべし是を
狂哥の題とせしは六帖主が新案にて
なる矣しかいふ是は類を尽して矢はいかう
いはゆるたとへもあらんなるをかゝる五行
集仁義五常をなずらへ桐の雅雄が

心肝五蔵の中までいれもあづ
えりて見しあげたるこの集冊しるの
うろふあひ性を感ずる五音六ても
ありけむ

文政五年五月

竹柳園主人

いまをのまへん子

伊勢物語のもじりかえしい

今日ろあ来のむかし

男も住とぞかくれなき

西の国へ往来平里

二世 朱楽館筆

至清堂 拾寛
花咲庵 米守
花源洞 繼穗
芳名垣 真芳
烟草館 香保留
岳亭

三十五 エト 亥故推 跡成
梅の花 見のところには 車 人とつくる ありてそろくや

五十 ロ 花咲菴 米守
いくら家 ねらひのや ぱらん 藪の中 稱雀と なかるゝ 松かん

三十七 ハキラ 宝樹園 龍丸 室有舎交
うられめの ねぢれ髪と こゝろざし ようよ人めてぬ 風のあとさき

名古屋
壷高窓　秋住

十三
君のみは
人こそ知らね
はるもなれ
つゐる
さくらの
花をなれく

江戸
花咲庵　米守

十三
三本の
扇子
なかも
あるる
世の中の
人の心の
花桜木

キリウ
壷喆楼　守芳

十三
八重九重
ひとつのこゝろの
わらふかろ
手すりやおかるの
山ざくら花

花林亭改
六菓園呆玩

十三　五
くらゝ
あかれもしやさのさくらの
さかりをめくほとくの
ちらぬころかな

岳亭

端午園
千巻
天故堆
跡成
甲花園
勝雄
壷諳楼
守芳
岳亭

楓

八八 すみきのかけに梅を染つくのきうしなふのかたちかな　六水園光雄

十五 よの飾をことにかかりし楓には天明後のくわしき事あり　多ノ　船盛

八七 すゑのかの松の下にかけてかかりつ何となくかちんの友　岸ノ　煙草亭中巣

七八 何となくあきの家にある秋くかしくくかかりとやかなしくのてり　多ノカノ　六葉園一朶玩

七七 山のはへ入日の朱をゆすりかくはれあくにあのかかちん　六義園奇種

十五 おもへるにものあさへん時雨の六補山杉にかへるゆふかな　一朶良茂樹

、、 うちゆけは宗鶴よりもめでたく松のこかりしきるの杉枝　見光　三界堂

、、 上戸かとのかけの杉のかけのやまのおくのかつらつつ　マ会　一岱

七八 丑三つに釘をうつ丑く手の目に杖をとりあり作壇の杖　多ノ　一朶玩

八八 ちりこもちる山すそのすゑの木のさきのあれる庵　秋ノ茶　槙下園千丈

杉

梭櫚

梅

化粧せし女乳者の者のかてもまた梅はしくかさにも大江戸　下サ　大漢夫

十二 菖蒲さへものかひし杉なる江の梅の根さし一の色をとかせるり　水戸　青馬

十 うくひすの戸にさへきや美しき江としく梅の花のしく露　夏躬

春かとし風の便りにさそふ梅かとてるすかつけのめせん　継穂

一二つも人花さきはちてもたしるまてまくく隣くちもかるぬ梅の香　千村

九 花の香も風にひそえて所童梅さくもの雲をおこしはかてさけ　和多守

船長ら棹さし袖にもかりてはおもかくれも梅さくの梅かな　松九　影住

花の香の白きにさきるくかてくらして来る梅やしきる　酒雄

春雨の糸のてぬくためよ程にかくるひもくの梅のちる笠　松鮏窩

うくひすのちつ音の里の梅さくもさくやの雨に声をひらける　吉躬

十六、
峰つゞき
ゆきの淡雪
風にちりゝく
よりのめくろし
青柳の糸
万歳音芳
十五、
軒のつま化粧しる木に
かゝれる雲鬟や
風の青柳
文園雨水
十四、
春風の
あらひ髪とも
なりにけり
ぬれ柳を
むすぶよこつ店
文泉舎
鈴繁
岳亭

やつこ梅の鉄炮垣をのりこしてさくらけをなし花の勝負　成安

梅かゝをとゝけて来ぬるハつたふる風の使のまちうけもなし　捨奥

佐保姫の化粧ひさしき美しく紅おしろいの笑うけのうめ　奇石

鶯ハ梅よそにて梅やしれ江戸ものめつる哥やよむらん　糸成

いたとるき家とハええ鶯の鳴きしハ梅の花のころや千苑　哥勝

声自慢ハ及もし鶯の玉をとりもみるかしらの梅　春岑

中のよね風にたくまてもきものくも袖や袂へたちうる梅か香　梅信

卧竜のかたちの梅の古株ハ白ひの閨のあしらひこそ見ゆれ　春樹

立かくる霞男の袖ひきかく笑顔やうめの香つる菌あるらん　同

うくひすもきなれし伴らへ袖ひさしくらや白き梅の下路　棹丸

鶯

雨にあひ風にあふても老やらぬ玉子の柳のもしハひくかれ　毛衣

たなひく吸火をかすみとて立かれた緑ろ軒をはけかる春柳　イセカトリ　文雄

花の香ハ梅にあの客にとあさ寝て羽柚をとふ我のうくひす　杉丸　影住

花笠の雨にぬれてやうくひすの柳のこのもかくれきこゆる　友丸

舟板をとりて作れる床の間に琴ひきそむる籠のうくひす　二喜

見るもやく壷の中なる天地や月日のめくるうくひすの篭　月光　思文

鶯ハ只ふくろ玉候しかまとの衣をきなれとあそふらん　同

所から稀きしの里のうくひすもめてもこつのへる園の竹笠　大阪　勝三

青柳のいと二筋にまつりて女次ノ琴ひくにあそふうくひす　松丸　影住

唐うたを教へし協をと伴にまた大和言葉もならふ春のうくひす　下サ　道廣

五、
かぞろうの
るかうるれて
さく梅も
いさゝその
扶のこゝち
もろろし

文泉舎
鈴繁

岳亭

十三、
鶯の
餘ん色ゆかしき
格子窓
琴代おし男家まや
あるらん

琴樹園二喜

五、
封のまゝまくひらくさう草双帋
つるその拙ふそらし年玉

文鎮園花貞

汝かぬ笠を名にもつかしやしれ梅も出るふき来るく鶯　下仁田 雨守

梅兼しけき竹の根岸の隠家も月日わめくる鶯のしる　笠成

盲かる吾妻の森のうくひすハたとてたちのある声をとくてなる　深谷堂

夜飼せしく世のつねてやかと近く火ともに梅ま鶯のなく　雨水

うゑ木やの名人の梅まつくひすの声をも高田のわとうまちなく　沖澄

雪ふるに山も春来たるうくひすの一声よりくるに銭のまる玉　水守

花笠をとなえてやあらんうくひすよのとけるまにひとの花へ　春永

梅かをとふれしく風よ素走る柳の笠をとやかふらくひす　同

あれまそし梅かゝる客もうき宿しの鶯の月日かなれ　詠兼

竹のそのしけるまるけからくひすの声の月日も梅るかなり　同

猪牙舟

十一 一二つらん新らしく梅の星の中へ三日月きるる偶田の猪牙舟　朝行

十 酒の香の匂ふ新川まらん堀への猪牙よ出る上て酔ふ人ハ誰　志丸

鉄炮洲たてしまる猪牙のむかひ舟の世とる妹や何かる　梅の屋

九 猪の牙の舟ハ北むしあけ汐に馬よりちやくたしる駒うく　花貞

板戸よりちしるのよろハ猪牙舟のみそ川を出てり油堀　和多守

うかれ女ま夜ハのられく猪牙舟よひかれ出るまへうつある人　雪益

弓張の月のひかりよりし帰るへそれそ矢さなとそしる猪牙舟　三千代

猪牙舟ハ三る夕月のさくちかく三八名堀へとくそく夕鶯　上サカリヤ 香安

いそそとり跡きつく浪の猪牙舟ハ手に怪し出る小新地のちかれ　梅人

闇の夜の佐炮洲かうハそくらし上むかふ三ほたる猪の牙の舟　琴彦

十五、
おそろしき
人の山そと
駿河ゟ
不二ものそらく
見る日本さし

新泉園
鷺丸

岳亭

十三、
養由う
一葉の舟も
矢のごとく
新地のさるは
ちる百歩楼

梅廼屋
雀子

十三、
九郎助の
いなりまつりは
かしましき
たいこ大勢
まわるちる千

万風園
千僚

十三、
信ふと
抔山と春の
さつかかに
二またちるよ
ひつ下水ゟ

形上旦粘

猪牙舟にくゆるこの火縄匂はせて鉄炮洲から通ふ深川　千僚

みとりなる若木の春の柳をし火縄もわそくさする猪牙舟　商人

家々にさらす弱女の家にいる柳の姿にほそく小舟は　水戸 詠兼

艪の音もやとゝそきこゆ隅田川花をさへてうつる猪牙舟　梅丗

秋萩の花むらさきの蒲萄色にて尾花屋につく猪の牙のたより　仲貫

猪牙舟にたてるこの火縄かよはせて鉄炮洲にもむかふ舟とう　梅信

三日月のちからにさえる山谷堀西へかへる猪牙の客　国吉

さかよのをとくるし舟は猪の牙の牙てふ名をもかりて負せし　真丸

初午

十
色紙の幟の雲にもちつ手にあ居の石を根とやなしけん　武白子 道廣

さる年の王子にかけそさしてまかる神をうとくして出る　貞雄

時鳥

十・十
ほとゝきす八千声をくあつたらの語に八こゑ八声つゝ一声の夜　高道

八 十
跡をよむみやこにまたるゝ雲ゐをあとにきこゆ山ほとゝきす　二喜

十 八
こゑはなき月にいくつかゝる空をあやなくあけぬ夏の夜の月　道文

十 七
ほとゝきす夜半の月にかくるあやむるくもゝ枕に耳ならさそふ　川近

十 十
ひとこゑはきゝわすれて葉桜の梢をわたる初ほとゝきす　有時　去

八 八
気にかけてまつ夜はすての時鳥を聞よむるの名にし松を　米守

八 七
つとめにはけむ鳩のきゝてぬるにもあひこの山ほとゝきす　高道

こゑやこゝにきゝつる声よそのたちし八錦に似たるやま時鳥　ナコヤ 鬼影

いそへ来つるにせんとうの初音をきくまつのくゆくほとゝきす　日光 鳳鳴閣

一五　都鳥園
ゆくのと
人はくるらん
ほとゝ穴
わとぬ
わろの
まかくれの
ころ

一五　芦菴
昔のまゝみつるの
ほとゝ反ゆかしかなく
まつぬよのふかく

一十三　随日園　勝良
ふゆのるさむつる
まさとほとゝ反
なく社ともちるは
あふゆのあめ

一十三　北茱子　捨魚
宮城ゝ夜訖
玉の俤の一節そ
まゝれし耳を
きゝなくりたわ

静ゝ舎 沖好
鳳鳴閣
唐白亭 音蝶
花々
蕉亭 円
岳亭

七十 秋にゆきの夕日をおほふ秋くものとゝくはかなる風の十てうしき　三陸　円

八八 夕立のなごりゆくあとよりも雲のみ雨もてむ風さむしき　沖母

八七 あつき日かつらく青葉に落ちたる外を松のてる涼しさ　十三や　竹意菴

すゞ虫の籠にこつ風のすゞしさにはなるゝ〇ならずかなけ　花々

七八 かゝるてるにかゝえの山まつはたのあつさにさそすみぬ末とくにも　多筆　櫻の壺

あふぎにかへしていくのあとえ動かしてあつくはなる風の涼しさ　水々　實

日さかりはあつきのこあらる風にふかりきてすゞしこゑの松かけ　都鳥園

七七 むかしとやまむかひかゝる夕風に袖をえむたく涼む乙女　山櫻亭

六八 すゞしさは夏もあやすよくなかるらかつく風の涼しさ　芳入亭萬守

うくたちの枝をあとかれてすゞしさかぞやかゝしる夜の夕風　箕華菴種成

十七 ちのうし つくはの川ふかくていくつきしとゝすゞのかる　奈可芳

八八 はるの梅の花のちるも いよその音にも似たるそよこのうえうせ　川近

六十 はう井のいろまなかれや秋花にむらさきとくあむき猶涼　同

七八 夕つる秋ひらくとされの日影によるる涼しつる羽のいろ　奈可芳

十五 山の夕たちきむさしのにさそ出て風ゆくらくかるきのなき　見　鳳鳴閣

七七 るさのこれゆのつるに涼しのかのこもおしるそよこの末つま　藤雄

うつらしさかしるの空をりさこれて化粧のかをまへおそこくり　舟守

五八 あさの庭の露花くるにおふのかほるつきもつゆをむすんで　奈可芳

根の茂にまさるの友とふむらさきのさあやうつくん言保秋の里　文数

おきれつゝしくうにまさる〇のさそうすとよろしさく萩の上風　フクシマ　仁孝舎伽維九

十三　芦庵
ちらはなにあるのほとゝころまよ
見くをとゝめぬ夕科のくもの峰

三八　東栄子　米守
鶏にあやなる巾よ石助の
むらさきめぐり ふみゝての朶

七三　下谷桜井　浅波菴
涼しの
光る月や
みとゝん
海の夜
きりま
中よのふ
あるゝの冬

六三　壺月堂　市住
もつれ
鈴のつく
てんきるハ
夕さくのあるの
またされて
頼みぬ

岳亭